

社団法人 日本図書館協会 図書館学教育部会

会 報 第2号

昭和51年3月31日発行 編集・発行 図書館学教育部会

本年度事業計画について

図書館学教育部会の本年度事業計画は5月下旬の部会定期総会で正式に決定されることになっていますが、総会に備え、幹事会で目下検討している主な内容は次のとおりです。本号を御覧の上、定期総会には活発な御意見をお寄せ下さるよう期待します。

研究集会の計画について

51年度の事業計画の一つとして研究集会の開催を検討しています。昨年度は開催できませんでしたが、今年度は十分な準備を整え、ぜひ研究集会を成功させたいと、現在、幹事会で企画を練っています。

そのテーマとしては、まず、図書館学教育基準の検討が考えられます。これについては大学基準協会から近く一応の成案が出される予定です。この教育部会でも「図書館学教育改善試案」が作成されたものの、十分な検討を経てはいません。従って、この機会にあわ

図書館学教育部会総会の開催について

5月21日(金)午前10時—12時に、日本図書館協会で部会総会が開かれます。50年度の事業報告、決算報告並びに51年度の事業計画および予算案の審議などを予定しています。ご多忙でしょうが、お縁り合せの上、ご出席下さい。なお、出席できない方は『図書館雑誌』4月号の折込みのはがきによる委任状をお送り下さるようお願いします。

せて討議することができます。また、図書館学教授要目(シラバス)については、過去2年以上の歳月をかけて検討し、今回の『図書館学教授要目』の印刷公表によって一段落つきましたが、これで終ったわけではありません。これを手がかりにして、表裏一体の関係にあるカリキュラムの検討にテーマを移し、さらに追求する必要のある問題です。このほか、図書館員養成の全国的計画について研究討議することも有意義と思われます。現在、わが国では、大学、短期大学、大学院などのさまざまな図書館学課程において、教育訓練が行われていますが、図書館からの求人、卒業生の進路などの実態の把握は必ずしも容易ではありません。従って、この問題も研究集会のテーマとなりうると思われます。

以上、テーマとして考えられる数例をあげたにすぎませんが、教育関係者および教育に関心をもつ人ができるだけ多く参加して実りある研究集会が開催できるよう、テーマ、開催時期等について部会員のご意見をお寄せ下さい。

全国図書館大会図書館学教育部会について

昭和51年度全国図書館大会は東京で開催される予定ですが、日時および大会の規模一部会の構成など一が未定であるので、目下のところ幹事会としてはこれらの点が明確になり次第、具体案を検討したいと考えて居ります。定期総会の際、建設的な御意見が寄せられることを期待致します。



「図書館学教授要目」発行のお知らせ

二度にわたる研究集会において部会員の方々の熱心な討議の結果がまとまり、「図書館学教授要目」が発行の運びとなりました。

第Ⅰ期 「図書館学概論」「図書館資料論」「図書館資料組織論」「図書館奉仕論」「図書館経営論」

第Ⅱ期 「図書館史」「参考業務」「逐次刊行物」「情報検索」「読書指導」

第Ⅰ期分については、1973年8月に高野山において、第Ⅱ期分は1974年8月に東京において開かれた研究集会で部会員多数の参

加を得て討議され、また図書館大会、さらには公聴会で広く御意見の聴取ができた結果をまとめたものです。

図書館員の教育は、社会の要請にあったものでなければなりませんから、今後も改善を重ねてより良いものに致したく、皆様の御意見を幹事会へお寄せ下さいますようお待ちしております。

教授要目は一部1000円です。会員がJLAで直接お買い求めの場合は800円、郵送の場合は前金に限り900円で送料はJLAが負担します。ご注文の送金は同封出版部専用郵便振替東京0-9375をお使いください。

図書館学教育部会に望むこと（アンケート）

石田 公道（北海道教育大学）

(1) 研究集会の在り方について

とくに意見はありません。ただ単なる実状報告でなく、研究集会の名に値するように質的な向上を考えなければならない時機にきていると思います。

(2) 全国図書館大会図書館学教育部会の在り方について

全国図書館大会は参加する人々の意識もお祭りにでも行くような傾向があり、質的に深めに行くような工夫が必要でしょう。別に独自に開催した方がよくなはないでしょうか。

(3), (4)についてはとくに意見はありません。

加納 正巳（静岡女子大学）

(1) 年1回の研究集会の討議だけでは実りがうすい。

ブロック単位の集会を開き（組織強化にも役立つ）、その成果を全国的な討議の場である研究集会に反映させ、討議を深めることができ

必要ではないか。

(2) 研究集会との関連性がはっきりしない。

大会の他部会への参加からか出席者も限られており、また「積極的な発言もなく」、研究討議する場としては段々不適当になってきている感がある。次期大会開催県未定という深刻な事態に直面し、大会のマンモス化が問題にされ、部会の構成のあり方も再検討を迫られている際でもあり、教育部会も再検討の必要がありはしないだろうか。

(3) 教育部会（各種委員会）の活動状況報告は「図書館雑誌」を活用し、会報には図書館学教育に関する内外のニュース・文献の紹介、会員の消息等を掲載し、また会員の意見交換をはかる場として生かしていくために、定期的な発行を望みたい。

(4) 未登録の図書館学担当者に登録を積極的に呼びかけてもらいたい。

本部会が「図書館学教育の理念を創造し、新しい図書館学の教育体系を確立しよう」と

努力を積み重ねておられることはわかるが、それと同時に部会としては、大学における図書館学教育の実態をふまえた研究討議がもっと進められる必要を痛感している。そして切実な当面の問題について、文部省、各大学当局への強力な要請活動を行なうぐらいの指導力を発揮してもらいたい。たとえば、司書課程をせめて教職課程なみに、「届出制」から「認可制」への改正、図書館学担当専任教員の必置（複数配置）等の要請は、誰しも異存のないところであろう。

木原 通夫（堀山女学園大学短期大学部）

(1) 研究集会の在り方について

- a 単に教育者だけが対象のテーマではなく現場から要求される図書館学教育をテーマに、現場の館員と論議することも必要。
 - b 図書館員の需要との関係から、司書課程のあり方、図書館学教育の内容を再検討する時期にある。
- (2) 全国図書館大会図書館学教育部会の在り方について
- 短時間であること、教育者が他の部会に出席することもあって、内容がその場かぎりで充実したものは期待できない。
- (3) 会報の内容、(4) 部会の運営について
- a これまで部会がとり上げてきたテーマを年代順にリスト・アップしてほしい。
 - b これまでのテーマの中にも、部会としてまとめあげるべきいくつかのテーマがあつたはずであるが、中途半端に終止している。継続性がほしい。
 - c i) 教育者の地域毎のグループを結成し定期的な情報交換もしくは研究発表 ii) その結果を部会報を通じて、各地域毎の情報が得られることを希望する。

梶井 重雄（北陸学院短期大学）

(1) 研究集会の在り方について

在来の研究集会の在り方は、それぞれ有意義であったと思いますが、日本の図書館界が

法精神無視の方向に下降してゆく現状を直視し、抜本的な改革を断行すべき時が至っていると存じます。日本図書館界は、公共図書館に於て県立をはじめ非専門職の館長が安易に館長の職につき、大学図書館の館長の大部分が非専門職員の教授によって占められていることは誠に遺憾で、日本図書館界を動かすべき母体が皆無に等しいというべきであります。研究集会も、教育部会もこのことに思をいたし、先進国の図書館の現状とその歴史を明らかにして、日本の図書館界のあるべき姿、日本図書館学のあるべき姿、一理想像一を確立することが急務であると存じます。かくして理論と実践の両面から行政の面にも力をもつものとしてゆかねばなりません。(2)(3)(4)も此の主旨で活力にあふれたものたらしめたいと思います。

塩見 昇（大阪教育大学）

- (1) 教育部会として、わが国の図書館学教育の現況、実態（制度、内容、方法を含めて）を明らかにし、今日の図書館運動のなかで「教育」がにならるべき課題を、部会員の共通理解としてたしかめることが必要である。その一環として、研究集会では教育内容、方法の実践報告、そのなかでの苦悩を卒直にだし、研究・討論を蓄積することが必要。
- (2) 図書館大会という場を考えれば、部会員（教育者）だけの集まりをもつのではなく、共通部会として図書館学教育、図書館員養成の問題を、現場の図書館員、図書館利用者をも含めて討論する場を教育部会が準備するというように考えたい。教育者自身はむしろ各部会に研究者として積極的に参加し、現場の人たちと交流することが大会では重要である。
- (3) 地域ごとに教育者（教育に関心をもつ者を含めて）の交流の機会をひらく組織的な条件を整えることが必要。「担当者名簿」に掲載された約520名（丙群担当者を除く）のせめて半数以上を部会員にできる程度の組織強化をめざしたい。

アンケートに対するお答え

図書館学教育部会幹事会

当教育部会では、部会の円滑な運営を図るために、定期総会をはじめ全国図書館大会図書館学教育部会・研究集会などの席上を通じて部会員各位の部会運営に関する御意見・御希望をできるだけうかうかよう努めてきました。たとえば、昨年10月島根県松江市で全国図書館大会が開かれ、図書館学教育部会（第8部会）が持たれた折にも、「地域毎に教員のグループを作り、話し合いの場を持ちたい」、「教員のためのシラバスがほしい」、「会報を発行して、中央と地方のコミュニケーションを図ってほしい」、「部会は（中略）日本全体の図書館員の需要との関連において、司書課程の数や教育内容等を検討すべきである」（図書館雑誌 v. 70, no. 1 参照）などの御意見が出されました。

そこで、幹事会では今後の部会運営をいっそう円滑なものとするため、「図書館学教育部会に望むこと」と題し、(1) 研究集会の在り方について、(2) 全国図書館大会図書館学教育部会の在り方について、(3) 会報について、(4) その他から成るアンケートを全国各ブロックから8名の部会員の方々におねがいをしました。その結果上記5名の方々から回答を頂戴しましたので幹事会ではこれら回答の内容を拝見しながら討議を重ね、幹事会としての考え方を一応まとめ、お答えとして次に記した次第です。茲に回答をお寄せ下さった5名の方々に厚くお礼申し上げると共に、さらに多くの部会員の方々が今後とも隨時御意見をお寄せ下さるよう期待致します。

(1) 研究集会の在り方について

「単なる実状報告でなく、質的向上を考えよ」（石田氏）、「ブロック別集会を開き、その成果を全国的な研究集会に反映させよ」（加納氏）、「教育者だけのテーマとせず、

現場の求めるテーマを現場の館員と共に討議せよ」（木原氏）、「館員の需要から見た司書課程の在り方、教育内容を」（同）、「日本図書館学の理想像の確立を」（梶井氏）、「今後の図書館運動で教育が担うべき課題を共通理解としながら、教育内容・方法についての実践上の問題点について研究・討論を」（塩見氏）などの御意見が出ました。

ブロック別の研究集会はたしかに加納氏も指摘しているとおり、部会の組織強化にも役立つと思いますが、部会の現有勢力などの面から一挙に地方別研究集会を持ち得ないのが実情です。併し、今後は部会員の多い地域から逐次この方向も検討したいと思います。

現場の求めるテーマや図書館運動で担うべき教育的課題について図書館員と共に討議することは、たしかに図書館学の性格からみていいせつなことですが、今後この点は全国大会の部会の場をできるだけ活用するように努め、研究集会ではそうしたことを踏まえ上で教育内容・方法の質を高めるための適切なテーマを選び、部会員を中心とした密度の高い研究討議を進めるようにしたいと思います。なお、館員の需要から見た司書課程の在り方については、何れ図書館学教育の全国計画についてのプロジェクトを発足させたいと思っています。

(2) 全国大会図書館学教育部会の在り方について

「大会とは別に開催したら」（石田氏）、「他の部会との関係で出席者が限られ、積極的な発言もなく、研究討議の場として不適当」（加納氏・木原氏）、「教育者だけの集りとせず、図書館員・利用者も含め、教育・養成の問題を討議する共通部会にせよ」（塩見氏）などの御意見がありました。

たしかに、大会の教育部会は他の部会への出席と重なり、出席しにくいのが現状です。従って今後は図書館員・利用者も含め、教育の問題を広く見渡すためにも、塩見氏の指摘されるように、共通部会的な方向を考え、どちらかといえば教育者自体に関することは(1)でのべたように研究集会を討議の場としたほうがよいように思われます。

(3) 会報について

「ニュース・文献紹介・会員消息を中心として定期発行を」(加納氏), 「従来とり上げてきたテーマのリスト・アップと重要テーマの継続を」(木原氏), 「地域別グループを結成し、各グループの活動と研究発表についての情報を」(同)などが主な御意見でした。

加納氏の御意見は会報の性格上極めて当然なものといえますので、本号でその試みをしましたが、今後も継続したいと思います。就ては部会員の皆さんから大・小となくニュース(特に地方のニュース)その他の原稿をお寄せ下さるようおねがい致します。なお、従来当部会で取り上げてきたテーマのリスト・アップについては、部会運営の積み重ね、継

続性を図るためにも検討してみたいと思います。

地方別の組織作りについては、(1)でのべたように直ちに全面的実施は困難ですが、可能な処からその実現を促進し、それぞれの情報・研究の成果を掲載できるような方向で考えたいと思います。

(4) その他

加納氏からは「部会未登録者への積極的呼びかけ」、「司書課程の教職課程並の取扱いと専任教員の複数配置に対し、文部省へ要請を」が、塩見氏からは「地域毎の交流の機会を」が御意見として寄せられました。

専任教員の複数配置については、これを実現している大学が徐々に増えつつありますが、目下おこなわれている大学基準協会の図書館学教育基準改訂作業と当教育部会がまとめた図書館学教育改善試案の今後の取扱い方を踏まえながら、その促進方を考える必要がありましょう。

地域別の交流の機会については前述のように可能な地域からの段階的実現を考えたいと思います。

文献紹介

Bramley, G. *World trends in library education.*
London, Bingley, 1975. 234 p.

著者Gerald Bramley 氏はリバプール図書館学校の教授で、1969年にBingley社より “A History of Library Education”を出している。

本書は、近年図書館学校が急激に増加した理由、およびその現状と将来の展望とを調査したものである。全体は4部に分かれ、1部は英語諸国で、英、米、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド。2部はヨーロッパだが取り上げている国は、スカンディナヴィア、ソ連、東欧は、政府が図書館職員の教育基準、認定等を行なっており、アフリカのように英・米国やユネスコに図書館学校の設置、教員の派遣等の援助を受けている国々もあって、これらの異った教育パターンや問題点が明らかにされ興味深い。

となっている。4部は図書館学教育の実際として、図書館学校、科目の評価、授業、理論と実務の関係等となっている。

英米とその流れを汲む英語諸国では、専門職としての図書館員の教育に図書館協会が主要な役割を果たしているが、スカンディナヴィア、ソ連、東欧は、政府が図書館職員の教育基準、認定等を行なっており、アフリカのように英・米国やユネスコに図書館学校の設置、教員の派遣等の援助を受けている国々もあって、これらの異った教育パターンや問題点が明らかにされ興味深い。

Zachert, M. J. K. *Simulation teaching of library administration*. N.Y., Bowker, 1975. 297p.
(Problem-centered approaches to librarianship)

ザカート女史はフロリダ州立大学図書館学校の助教授で、著者が実際に行なっている図書館経営の課目のシミュレーション・ティーチングの方法を具体的に述べたものである。修士課程の学生を対象にしており、民間および政府関係の専門図書館を幾つか想定し、親機関と図書館との関係、組織図、職員、予算、図書館平面図、年次報告等詳細な資料を与え、コンピューターを使って図書館の管理者が当

面するあらゆる問題を学生に経験させ、解決させて行こうとする新しい教授法である。

シミュレーション・ティーチングとは宇宙飛行士が、地上に無重力状態を再現して月面着陸の訓練を行なったと同様、幾つかの専門図書館を想定して、図書館の管理者が直面するさまざまなケースを学生時代に体験させるやり方で、図書館の分野では始めての試みで話題をよんでいる。

文献紹介

ニュース 図書館学教育基準の改訂

大学基準協会は昨年から図書館学教育基準の改訂作業を行なっている。改訂の理由は昭和29年に決定した現行の基準が現状にそぐわなくなってきたので新しい内容を盛込み今後の方向づけを意図しているものである。改訂を担当している委員は10名で、すでに十数回の会議を重ね、常に熱心な討議が行われており、夏頃までには一応の改訂案ができる予定である。この新しい基準案ができ次第、何らかの方法で図書館学教育担当者からの意見聴取が行われる予定である。

情報図書館学研究センターの設置

東京大学では大学図書館と大学において処理すべき学術情報とを有機的関連あるものとしてとらえ、いわゆる Library and Information Scienceを総合的に研究し、かつそ

れに関連する技術開発を行うための学内共同利用施設として情報図書館学センターを新設することになった。その目的を達成するため、研究および技術開発のほか、図書館の専門職員の教育訓練が行われる。なお、開設は昭和51年5月中旬の予定である。

図書館・情報学に関する第4回国際夏期大学院の開催

本年7月1日から8月21日まで、英国のウェールズ図書館大学で開かれる。詳細は Director IGSS 1976, College of Librarianship, Wales, Aberystwyth, Great Britain. へ紹介のこと

部会長再選挙結果報告

前号の会報で公示された図書館学教育部会長の再選挙は昨年10~11月に亘り実施され、新部会長に裏田武夫氏(東京大学)が選出・就任された。任期は昭和52年3月末日迄である。

計 報

津久井安夫氏逝去

図書館学教育部会員津久井安夫氏（十文字女子学園短期大学）は去る昭和51年1月15日心不全のため逝去された。享年71才。同氏は昭和4年立教大学哲学科を卒業、同大学助手となり、同時に図書館に勤務、18年副館長、のち文学部講師、その後明治学院大学、中央大学、学習院大学の各図書館を経て、最近は十文字女子学園短期大学で図書館学を担当、後進の教育に当って居られた。館界長老のお一人で昨年度の部会総会にはお元気な姿を見せて居られた。こゝに計報に接し、謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げる次第である。

鈴木幸久氏来日

部会員鈴木幸久氏（ハワイ大学）は本年1月～6月まで滞在、大阪学院大学で図書館学の担当をはじめ、アメリカにおける日本研究関係の調査研究に従事して居られる。

古本定義氏転居

部会員古本定義氏（広島県立図書館）は今度下記に転居された。

※

渡辺信一氏ミシガン大学へ

部会員渡辺信一氏（同志社大学）は本年2月、ミシガン大学図書館ビブリオグラファーとして赴任された。6月まで在米の予定である。

~~~~~ 会 員 消 息 ~~~~

裏田武夫氏東南アジア諸国を歴訪

本部会長裏田武夫氏（東京大学）は昭和51年3月11日から5月10日まで、東南アジアにおける図書館員養成の調査研究のために、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、オーストラリアの各国を歴訪中である。

黒岩高明氏イギリスに留学

部会員黒岩高明氏（図書館短期大学）は昭和51年3月～52年3月の間イギリスに留学のため出発された。主な留学先はミラノ図書館、バチカン図書館、エグゼクター図書館学校、ロンドン大学等である。

渋谷嘉彦氏相模女子大学講師に栄転

部会員渋谷嘉彦氏（図書館短期大学）は本年4月、相模女子大学専任講師に栄転された。今後の御活躍を期待する。

幹 事 会 記 録

1975年11月29日

出席者：北島、浜田、長沢、今、前島、黒木
前島選挙管理委員長より部会長選挙経過の報告があり、裏田武夫氏（東京大学）が選出され、承諾書も提出された。幹事会はこれを受領し、直ちにJLAに報告した。この日をもって選挙管理委員会は解散した。

1975年12月26日

出席者：裏田、北島、浜田、長沢、室伏
新旧部会長の引き継ぎ、および挨拶

1976年1月30日

出席者：裏田、浜田、長沢、今

昨年5月の総会で報告された事業計画の検討

- 改善試案については、大学基準協会の結論をもって再検討する。
- 教授要目 最終の主査の会を開き出版を推進するよう部会長より岡田委員長に連絡する。事務は今幹事が担当。
- 図書館利用指導委員会 部会長より深川委員長に連絡し、今後の方針意向をきく
- 研究集会 昭和51年度長沢幹事の担当

5. 会報 北島幹事を中心に推進する。
6. 図書館大会 開催地の決定をまってテーマを決める。
7. 図書館学テキスト 出版委員会から要請が来ているので、教授要目や基準等の発行後、研究集会等で討議して進める。
8. 図書館学教育の全国計画 詳細については今後検討をしていく。

1976年3月26日

出席者：北島、浜田、長沢、今
会報2号の編集会議

以上

昭和50・51年度部会費をお納め下さい

図書館学教育部会では昭和49年度から部会費として年額1,000円を納めて頂くことになって居ります。この部会費は主として会報印刷費・通信費などに充当されるもの

です。昭和50年度・51年度(それぞれ1,000円)未納の方は同封振替用紙(東京1-24181)で御送金下さい。

✿✿✿ 编 集 後 記 ✿✿✿

会報第2号をお届けします。本号は来る5月下旬開催の部会定期総会のいわば準備号として、本年度事業計画の概要、部会運営に関する部会員へのアンケートとそれに対する幹事会からのお答えその他で構成しました。アンケートに御協力下さった5名の方々はじめ、

多くの方々の協力により、御覧のように紙幅の割合にバラエティに富む内容となりました。改めて上記の方々にお礼申し上げると共に今後も部会員の交流に役立つ会報作りに努力したいと思いますので御支援の程お願い致します。
(K)